

美術教育からみる〈老〉と〈幼〉

Considering Old Age and Youth from the Perspective of Art Education

田中 千賀子

TANAKA, Chikako

はじめに

本稿では、〈老〉と〈幼〉という主題について、美術教育の視点から考えてみたい。とくに高齢者、幼児を対象にした造形ワークショップにおけるファシリテータの視点に着目し、それぞれの特徴について考察する。

少子高齢化が社会課題として認識され、〈老〉と〈幼〉が政策の対象とされるなかで、そこには援助するものとされるものという関係性が生まれる。こうした自らの力で生きることができないこと、他者によって生かされることに対してネガティブな印象をもってしまうのは、主体的に生きることを推奨され、すでに私たちがこれを内面化していることの表れであろう。自らの意思によって、自ら行動する主体性のある人格の養成は、いまや学校教育の理念の基本である。〈幼〉に象徴される子ども、〈老〉に象徴される高齢者、とりわけ社会福祉サービスを要とする高齢者は、自己決定によって自らの行為を選択できない存在としてみなされがちである⁽¹⁾。

澤佳成が指摘する通り、〈老〉が社会的にネガティブとされることの主要因に「近代化」がありながらも、「人間が、特定の権力者や他者から干渉されずに、自らの意思によって、すなわち自己決定によって自らの行為を選択できるようになった」（澤2014）こと自体は近代化による肯定的な側面であろう。人間の権利を基にする主体性は、これが失われていくように想像される〈老〉の時期のみならず、

これからそれを身につけていく〈幼〉に対しても保障されなければならず、これを可能にする場の積極的な創出が求められる。高橋在也のいう〈語り〉の場は、こうした主体性の回復の場としても理解することができよう。高橋が対象としたのは年を重ねた者の〈語り〉であり、ある人の過去における真摯な思考や模索の〈語り〉の場の必要を説くものである（高橋2014）。

本稿では、これに〈幼〉の視点を加え、まさに個人の思考や模索の過程と成果である造形表現を〈語り〉のひとつのかたちとして捉え、考察をおこなう。造形表現の場において、検討の対象は幼児という言葉や過去をもたないものにまで広がる。ここでは、とくにあらゆる年齢層を対象に実施される現在の造形ワークショップの取り組みと、これを支えるファシリテータの存在に焦点をあてたい。造形ワークショップは、狭義には美術教育の一環として位置づけられる。美術教育は個人の尊重、他者理解の姿勢、主体的な態度の養成のために期待されながらも、学校教育での実践に対する限界も指摘される。これに対し、学校内外問わず、美術館、社会福祉施設など様々な場面で展開されつつあるのが、造形ワークショップである。

造形ワークショップにおけるファシリテータは、参加者を評価したり指導したりするのではなく、参加者自身の学び、気づきを重視し、それを引き出し、支援する存在である。報告者は、こうしたファシリ

テータに必要な資質や能力の養成について、授業実践と同時に、考察をおこなってきた。ファシリテータからすれば、参加者の年齢、性別、身体上の違い等も、個人の特徴のひとつとしてみなされ、むしろ〈老〉と〈幼〉というカテゴリーを分けること自体が大きな意味をもたない。ファシリテータの具体的な対応のなかから確認できる〈老〉と〈幼〉に対するまなざしは、私たちがもつネガティブなイメージに集約されない諸相の一つとして描き出されるのではないか。ここでは、報告者があえて〈老〉と〈幼〉のカテゴリーを設け、ファシリテータを観察した場合の対応の違いについて考察してみたい。具体的な対象は、報告者が2013年度より担当している武蔵野美術大学の授業科目「美術と福祉」と、2015年度より実施している「つむぎワークショップ」である。高齢者、幼児のそれぞれの特徴に留意しながら、これを企画し、実施するファシリテータの視点を考察する⁽²⁾。

1. 造形ワークショップとファシリテータ

教育としてのワークショップについて説明しておきたい。ワークショップは、日本ではまさに戦後教育改革における主体性の育成の方法が問われるなかで導入された概念である。16世紀の作業場・工房という意味に始まり、20世紀の教育改革以降は、講習会・実習という意味で用いられてきた。

一方、高橋陽一は、現在のワークショップという言葉には、2つの意味では説明しきれないニュアンスが含まれていることを指摘し、これを「参加者が主体となった教育であり、その過程や結果を参加者が享受することを目的とするが、その知識や技術の習得や資格の取得などを目的とせず、さらに準備して見守るファシリテータは存在しても、指導して評

価する教師が存在しないもの」(高橋 2015 : 159-171)と定義する。確かに現在のワークショップという言葉は、誰もが参加しやすそうな雰囲気を漂わせている。これが高橋のいう参加者の主体性の尊重、資格取得などを目的としない点、指導や評価をしない点によるものであるといえよう。

今回対象とするのは、なかでも造形表現を中心とした「造形ワークショップ」である。これが、絵画教室や陶芸教室とも異なるのは、作品の技法や知識の習得のみが目的ではなく、また作品の成果が評価されるものでない点である。作品制作をとおして得られる参加者それぞれの学びや気づきが重視される。そしてこうしたワークショップを成立させるため不可欠なのが、個人の学びや気づきを引きだして援助していく「ファシリテータ」の存在である。ファシリテータには多様な参加者個々の特徴を認め、援助すべき対象に対して上下の秩序づけをなさずに関係を持つことのできる資質、つまりファシリテーション能力が必須とされる。

2. 造形ワークショップのひろがり

いまやアートは、アーティストが占有する特別な表現ではなく、より多様な人々によってなされるものである。アートプロジェクト、参加型アートの台頭にみられるように、老若男女問わずあらゆるものの表現活動に意味が見いだされ、アートを問題解決の方法として活用しようという動きとともに社会におけるアートの役割が多様化してきた。

林容子によれば、1960年代のイギリスより発生した「コミュニティーアート」は、普段芸術に触れる機会の少ない社会的弱者を対象として活動がなされてきたとされる。芸術療法、アートセラピーといった分野では、無理のない芸術活動を通して、身体

能力を高めたり、認知症の治療をしたりすることが期待され、アートのもつ機能や役割を治療に活用するもので十分な学術上の蓄積もある（林 2006：25-26）。

林は、こうした従来のコミュニティーアートや、アートセラピーといったものとは異なるかたちで、「単に一般の人がアートに関わり、その楽しさを知ったり、アートを普及する方法論として作家の制作に参加」したりする「参加型アート」、「アートコミュニケーション」に注目し、ヘルスケアの現場での活動を推進している。アートセラピーに関していえば、これらが肉体や心のケアを中心とした「癒し」であるのに対し、アートコミュニケーションが目指すのは、「お互いに刺激し合い、楽しく、生き生きしよう」というものである（林 2006：53）。施設の入居者をケアされるものとして見なすのではなく、刺激を与え合うというスタンスは、相手の主体性が尊重される場をめざす報告者のそれと近い。

子どもを対象とした活動についても、多くの蓄積がある。1985年に開館した子どもの城の「造形スタジオ」は、開館当初から、造形、美術の「ワークショップ」を実施してきた。館長の有福一昭によれば、「子どもたちが、見る・触る・作ることによって、また、作ったもので遊ぶことで、自由で新鮮なイメージの広がり、創造の楽しさが体験でき、豊かで個性的な発想や情操を伸ばし、併せて集団としての活動の中から、社会性・協調性の育成を図ること」（高橋 2011：85）ができるという。

また、「旅するムサビ」は、武蔵野美術大学造形学科教職課程教授の三澤一実を中心に、授業外の活動として、学生がファシリテーターとして小学校や中学校に訪問し、「対話型鑑賞」や「造形ワークショップ」を実施している。三澤によれば、「教員、学

生、子どもという立場の違いを、美術を介し、それぞれが並列に並び、お互いの価値観を出し合う中で、個人の価値や他者の存在の大切さに気づいていくプログラム」（高橋 2011：85）だと考えられており、基本的に個人としての子どもと、その価値観を尊重しようというスタンスが表れている。

3. 報告者の活動とファシリテーター

(1) 授業科目「美術と福祉」—〈老〉に対して

筆者の担当する武蔵野美術大学の科目「美術と福祉」は、教員免許状取得のために必要な介護等体験について、事前事後の準備やふりかえりの指導をおこなうものである^③。筆者が担当するクラスでは、介護を要する高齢者が入居、通所する施設での、介護体験や造形ワークショップを実施している。指導の一方で筆者は、学生が5月に施設を訪問し、企画を立て、造形ワークショップを実施して、報告書にまとめるまでの過程を観察し、学生が身につけていくファシリテーション能力や、可能になるコミュニケーションの内容について考察をしている。

学生にとっては、高齢者が身近な存在でないことがほとんどである。4月の時点では、社会福祉施設や高齢者に対してネガティブな印象をもつものが多く、提出のレポートから散見されるのは「不安」、「最低限の生活」、「集団生活の中で個性が埋もれそう」、「自由が利かない」、「毎日の変わらない生活」といったキーワードである。

5月中旬には、施設に訪問してオリエンテーションをおこなう。実際に働く職員と会話をし、建物や利用者の様子を確認する。スタッフや建物に対して、予想以上に明るい雰囲気があったことに安心するものの、利用者の行動に制限がかけられていること（例えば、エレベーターが暗号式になっていること、

外に自由に出られないこと、手の届くところにもものを配置しないことなど）に対して違和感を抱く学生が多い。先述の林容子は、日本の福祉施設での生活は、効率的であるが意外性や新たな発見は無く、形だけのルーティンになること、また集団生活のなかで個が埋没することを指摘している（林 2006：17-19, 171）。学生はこうした状況に実際にふれるなかで、自分達が利用者に何か刺激を与え、不自由さを解放し、個人として尊重したいと考えるようになる。

学生の造形ワークショップの企画は大きく分けて、通所者と一緒に行う造形ワークショップと、入居者が利用する廊下の壁を飾り付けるものである。造形ワークショップでは、あらかじめ作っておいたパーツを好きなように配置させてつくる箱庭（図1）、好きな色を好きなだけ選んで配置する絵画などがみられる。飾り付けでは、外に出られない代わりに季節感のあるものや、自然とのふれあいを喚起させるような動植物などをモチーフにするものがある（図2, 3）。

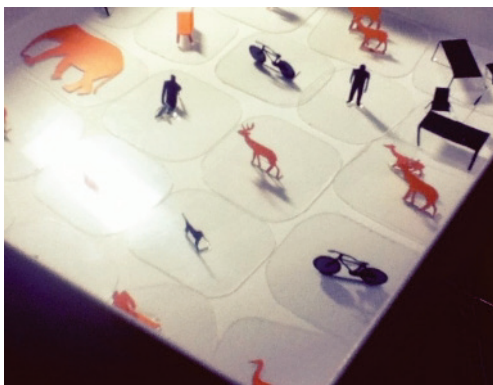


図1 学生がパーツを作成し、利用者が自由に配置する



図2 利用者とともにパーツを作り、壁を装飾する

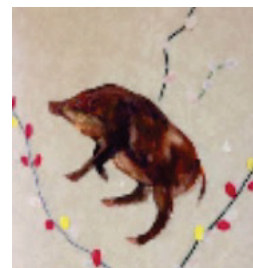


図3 学生が作成した絵画を壁に合わせて装飾する

9月の中間報告会では、それぞれの悩みや問題点

などを共有し、改善していくための機会をつくっており、このとき利用者とのコミュニケーションの難しさや、その改善方法があがる。「どのようにコミュニケーションとったら良いかわからなかったが、作業をしていると食いついてきた」、「強制しないで、ひたすら自分がつくっていたら、興味を持ち始めてくれたようで、少しずつ参加してくれた」など、言葉ではなく、作業や態度によって相手に意思を伝える方法を身につけ始めていることがわかる。また「筆を持つことに苦手意識があるひとが多くて、なかなか作業してくれなかった。そのかわり、指を使ったり、ただ色を選ぶだけならやってくれた」というように、代案をその場で臨機応変に提示することもできるようになっている。

授業最終日には、1年間の経過と成果をまとめた報告書を提出させる。「強制しないことが大切である。相手のペースに合わせることが大切である」というコミュニケーションの基本を実感するものは多数である。

興味深いコメントは、「皆でやることで、個人としての存在が消えることを喜ぶ方もいる」というものだ。「できないことに対する劣等感を消す必要がある」というコメントからもわかるように利用者の多くは、できないことを頑に嫌がる。共同作業は、個々の主張が薄まるのと同時に、できないことも目立たなくなる。自己主張だけでなく、主張したくない、参加を控えたいという姿勢を受け入れて、わずかでも取り込むことが、本人の意思の尊重であることが学生に理解されつつあるのがわかる。

また、なかには美大生である学生に、「あなたは上手だからよいけど、私にはできない、自慢しないでほしい」という利用者もいたという。こうした自覚がなかった学生にとって、聞いた瞬間はショック

をうけたそうだが、次第に自分の立場の特徴に気づき、相手のプライドを損ねないような対応をとるようになり心がけるようになったという。

(2) 「つむぎワークショップ」―〈幼〉に対して

幼児に対する造形ワークショップ「つむぎワークショップ」を取りあげる。羊毛から糸をつくりあげるプロセスを参加者が体験することで、素材の味わいや特徴に気づき、日常生活において身近にある道具や衣服に対して興味関心を抱いてもらうものだ。具体的な内容は、対象者の年齢等を考慮して、その都度難易度を変えているが、今回は、羊毛（フェルト）に、洗剤をかけ、手や道具を用いて形成し、乾かして髪留めやブレスレットの紐の部分を作り上げた。この目的達成だけに焦点を絞らないことに造形ワークショップの意味がある。作品をつくること以外に得られるひとりひとりの学びを、いかに引き出していたかが大切である。

実際にファシリテータとして活動したのは、東京家政大学家政学部造形表現学科繊維研究室助教の岡本恵氏である。報告者は記録者として、撮影などを主におこなった。今回は、2015年4月30日に「森のサロン」にて、幼児約20名と保護者に対して実施した内容を取りあげる。

森のサロンとは、2010年度より板橋区の地域子育て支援拠点事業の委託を受けて、2010年度より東京家政大学の教育研究機関であるヒューマンライフ支援センター（ヒューリップ）が運営している、親子、教職員、学生の交流の場である。東京家政大学家政学部児童学科教授の森田浩章氏が副所長をつとめており、スタッフは主に同大学児童学科卒業生で構成される。保育士の資格を有するものが必ず一人はフロアにいて、自由に訪問してくる利用者に対

応している。利用者は、板橋区の広報やロコミなどを通じて、大学近隣から集まっており、今回の造形ワークショップへの参加も、特別な申し込みなしで、自由に参加してもらった。

森のサロンの特徴は、森田氏の指針に基づき、子どもの興味関心を中心に活動できる場が目指されている点である。すでにスタッフがこうした考えを理解しているため、報告者の造形ワークショップと相性がよかったといえる。

まず導入として岡本氏から当日の流れが説明される。このとき写真のパネルで羊や羊毛ができるまでの過程を見せ、原毛の匂いや手触りを体感させ、別の素材からできた製品などが用意された。ワークショップに興味を持たせ、自発的な参加を促すための工夫である。原毛を触ること、写真を見ること、匂いを嗅ぐことなど、各々が関心をもった内容に集中できるように、十分な時間をとるように配慮してもらった。



図4 導入

活動中は、ファシリテータとしての岡本氏以外にも、森のサロンのスタッフがおよそ3人に1人の割合で補助した。全体を見守るスタッフがいたこと、また保護者がひとりひとりの子どもについていたことで、安全面の確保は充分になされていた。

行程の途中でひとつの内容に集中する子どもがいる場合も、その活動を認めた。一斉に説明ができなため、作業のペースがあわず、ファシリテータが対応しきれない部分があったが、保護者や森のサロンのスタッフがこれをカバーしていた。

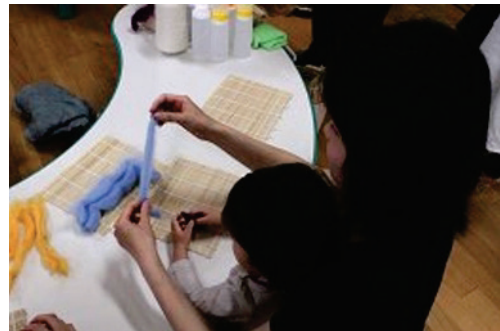


図5 活動中

またその場を離れてしまう子どももいるが、強制をせず、戻ってきたときに受け入れていた。こうして同じ空間にしながら様々な活動をおこなうためには、スペースの余裕が必要である。森のサロンはこれを普段から意識しており、十分な場所が確保されている。

ワークショップ終了後も興味を示した子どもに対して、自由に活動させた。そのときも全体を見守るスタッフが常駐している。終了後に、アンケートを配布し、7名の保護者から回答を得た。ワークショップへの参加は7名中7名が初めてであり、参加の理由には楽しそうだったこと、「こどもにいろんな体験をさせてあげたかった」ことなどが挙げられた。今回のワークショップで気づいた点、発見したことなどについては、羊毛という身近な素材で、充分に子どもが楽しんでいたことを感激する声が多かった。羊毛が縮まっていくところに新たな発見を見いだすものがあり、保護者自身がワークショップを楽しん

でいた様子がわかる。



図6 活動後

(3) 考察—ファシリテータからみた〈老〉と〈幼〉

ファシリテータの岡本恵氏は、普段は東京家政大学の助教として、授業において学生制作活動の補助などをおこなっている。一方、織物をもちいた芸術療法を研究テーマに、学外のボランティア活動として、20代後半から60代までの心身症の方を対象に、靴づくりなどのサポートもおこなっている。過去には1996年にユザワヤのカルチャーセンターで、高齢者の方々を対象に織物と草木染めの授業を担当していた経験がある。

つむぎワークショップに対する岡本氏自身の感想によると、参加者の集合時間がバラバラで、参加したりしなかったりする場合があったので、一度に説明や対応ができないことには、やりにくさを感じたという。

相手の良さを引き出すということよりも、まずはわからないことや、できないことをできるようにさせるための、サポートの方が多かったという。大人に対するサポートとの大きな違いは、「子どもはどこがわからないか、わからない。だからみている時間を多く必要とするのは確か」だという。今回は母親が代わりに意思を伝える存在になってくれたとい

う。全体として母親の方が熱心に作業に取り組む様子があった。これに対して、森のサロンの副所長である森田浩章氏は、母親の真剣な様子を見ること自体も、子どもの学びにとって重要だと述べて肯定している。

岡本氏は、過去の経験もふまえて高齢者の方々と大きな違いは、作業の促進のさせ方にあるという。とくに高齢者にはプライドを保たせることを大切にするとのことである。子どもや、学生に対しては、「まずはやってみよう」と奨めることができるが、高齢者には、できないと言わせないために、やれそうな作業を選んですすめるという。これは、武蔵野美術大学の「美術と福祉」で、学生が述べていた感想と類似する。できないことに対する嫌悪感が強く、特に絵を書くことに対しては、上手かどうかという基準が先行してこれを避ける傾向があった。ファシリテータである学生は、やはり筆の使用をやめたり、色塗りに作業を絞り込んだりして、技術が問われない内容を選んでいった。

おわりに

ファシリテータの対応の大きな違いとしてみえたことは、新たなことや、苦手意識のある参加者に対する関与のさせ方の違いであった。子どもに対しては、苦手意識が有る無しに関わらず、危険性さえなければ、積極的にそれを与えようとするが、高齢者に対しては、これを無理強いすることが出来ない。むしろ彼らに蓄積された経験、得意とすることを引き出すことが求められていた。こうした経験者からは新たな発見や、個性を引き出す事は困難に思われるが、ファシリテータが、方法を変えたりすることで、少しずつ新たな経験に踏み出す場面もあり、きっかけや刺激が与えられれば、主体的な表現活動は

可能である。

介護されることには、身体的な老いが大きく影響を与えるもので、それが個人の表現活動を萎縮させる可能性は否めない。ただし大倉茂の指摘の通り、「体力的には低下するものの、同時に賃労働から解放されるがゆえに自由な存在になり得るはずである」（大倉 2014）という側面ももつ。実際に 2000 年代後半以降に、老人芸術「シルバーアート」という表現活動が台頭してきたことが指摘されており、彼らの作品は「美術家の美術」ではなく、「きわめて健全で、「描く喜び」が満ち溢れている」ものであるという（福住 2015：88-91）。積極性をもって自らの経験を自ら発信できるものはまれではあるが、こうした存在をフォローしつつ、身近な範囲でもその可能性をみつけていく存在が必要だ。

一方で留意したいことは、ファシリテータのなかに、積極的に活動に参加しないスタンスを認める姿勢があった点である。参加の意思を強くもたないものや、それを継続できないものに対して、強制的な参加を促さないことは、選択の休憩を認める行為である。主体性の尊重には、積極的に選択し、行動するような態度のみではなく、それを休むこと自体も含むはずである。こうした場の確保が、常に選択を迫られる現代社会において困難であるなか、造形ワークショップにおいてこれを可能にする要因について、考察を続けていきたい。

注

(1) 例えば七星純子によれば子育ては「自分よりも弱く、自分の手助けを必要とする「異質な他者」と出会う経験」である（七星 2015）。

(2) 本稿では、幼児と高齢者に対するファシリテータとして、それぞれ異なる担い手を取りあげたが、

今後は、同じファシリテータが対象者によっていかに対応を変えているかについても考察する必要があると考える。

(3) 武蔵野美術大学では「美術と福祉プログラム」と呼称して、造形ワークショップを中心に据えた独自プログラムを小平市内の 6 つの社会福祉施設と提携して実施しており、複数の教員が担当している。

参考文献

- 大倉茂（2014）「現代社会における〈老い〉 近代化と人間の商品化の視点から 第 8 回研究大会若手シンポジウム報告」『総合人間学』第 8 号。
- 澤佳成（2014）「〈老い〉への考察をとおしてみえてきたオルタナティブな未来 第 8 回研究大会若手シンポジウム報告」『総合人間学』第 8 号。
- 高橋在也（2014）「人間にとっての〈語り〉の根源性 年を重ねた者と〈語り〉の場の生成 第 8 回研究大会若手シンポジウム報告」『総合人間学』第 8 号。
- 高橋陽一（2011）高橋陽一編『造形ワークショップの広がり』武蔵野美術大学出版局。
- 高橋陽一（2015）高橋陽一編『造形ワークショップ入門』武蔵野美術大学出版局。
- 七星純子（2015）「子育ての経験を共有する意義に関する一考察 第 9 回研究大会若手シンポジウム報告」『総合人間学』第 9 号。
- 林容子（2006）林容子、湖山泰成『進化するアート コミュニケーション—ヘルスケアの現場に介入するアーティストたち』レイライン。
- 福住廉（2015）軈の津ミュージアム監修『シルバーアート老人芸術』朝日出版社。

[たなか ちかこ／武蔵野美術大学／教育学]